

## 第40回発展途上国研究奨励賞の表彰について

「発展途上国研究奨励賞」は発展途上国に関する社会科学およびその周辺分野の調査研究水準の向上と研究奨励に資するために、アジア経済研究所が1980年に創設しました。

表彰の対象は、開発途上国・新興国または地域の経済およびこれに関連する諸事情を調査または分析した著作とし、次の①あるいは②に該当するものとします。個人研究、共同研究の別は問いません。

- ① 2017年10月から2018年9月までに国内で公刊された日本語または英語による図書、雑誌論文等
- ② 2017年10月から2018年9月までに海外で公刊された英文図書、雑誌論文等のうち、執筆時、公刊時もしくは賞応募時点において日本国内に所在する大学・研究機関等に在職している研究者（国籍は問わない）によるもの

2019年度は各方面から推薦された29点を選考し、最終選考で下記の作品が第40回受賞作に選ばれました。表彰式は7月1日にアジア経済研究所において行われました。

---

### 〈受賞作〉

『サルゴフリー 店は誰のものか——イランの商慣行と法の近代化——』（平凡社）

いわさきようこ  
岩崎葉子（日本貿易振興機構アジア経済研究所開発研究センター企業・産業研究グループ長）

『エ・クウォス——南スーダン・ヌエル社会における予言と受難の民族誌——』（九州大学出版会）

はしもとえり  
橋本栄莉（立教大学文学部准教授）

---

### 〈選考委員〉

委員長：田中明彦（政策研究大学院大学学長）、委員：上田元（一橋大学大学院社会学研究科教授）、大塚啓二郎（日本学士院会員）、栗田禎子（千葉大学文学部教授）、藤田幸一（京都大学東南アジア地域研究研究所教授）、深尾京司（アジア経済研究所所長）

### 〈最終選考対象作品〉

最終選考の対象となった作品は受賞作のほか、次の1点でした。

1. 『「移動社会」のなかのイスラーム——モロッコのベルベル系商業民の生活と信仰をめぐる人類学——』（昭和堂）

著者：齋藤 剛（神戸大学大学院国際文化学系研究科文化相関専攻教授）

●講 評●

岩崎葉子『サルゴフリー 店は誰のものか——イランの商慣行と法の近代化——』

うえ だ げん  
上 田 元

本書は、イランの都市商人たちが店舗を借りて営業する際に支払う金銭に焦点を当てながら、経済制度と法の絡み合いを解き明かそうとする、非常に興味深く、意欲的な論考である。

テヘランの商人は、店舗の所有者に毎月の賃貸料を納めているが、それに先立ち「店舗で商売する権利」を高額で買いとる例が多く見られる。本書のタイトルにあるサルゴフリーとは、立地条件や営業手腕で額の決まる、暖簾の権利を指した。商人が借りていた店舗から退去する際に、この権利を後継商人に売る慣行があったことを、著者は1920年代に遡って確認する。ところが1940年代になると、店舗所有者が商人を立ち退かせる場合にも、この権利を補償するよう法制化されてしまった。これは財政立て直しのために派遣された米国人がイスラーム法に基づく近代法に欧米流の概念を紛れ込ませた結果だが、従来の商慣行にはない規定を導入するものであったため、誰が誰に補償するのかをめぐって混乱を招いた。本書は、そうしたなか店舗所有者や商人が秩序を立て直す様子を描き、法がその新秩序にどう対応して今に至ったのかを、手に取るように追体験させてくれる。

本研究の重要な貢献は、イラン固有の歴史を踏まえつつ、経済制度と法が相互作用する様子を長期にわたってとらえたところにある。とくに、イスラーム法が社会の動き・求めに連動する可変的な存在であることを示したのは、刮目に値する。扱われた法の近代化・多元化の例は、

不動産などの所有権と用益権にかかわる問題群に取り組む研究者一般に多くの示唆を与えるものでもある。また、当事者の損得に立ち入りつつ経済制度の変化を説明する論理も明晰である。そして強く印象に残るのは、情報の得難さを補うために、議事録を用いて国民議会でのやり取りを蘇らせ、イラン革命後にイスラーム法学者が述べた見解に触れ、また聞き取り相手の語りで肉付けするという、臨場感あふれる手法である。

本書が仮に、店舗にまつわる支払いの経済学的な性格や、近年の都市再開発後の店舗売買・賃貸借に見られる変化の兆しについて、より掘り下げた議論を展開していれば、さらに参考になったであろう。また、著者も自ら指摘している店舗所有者の地位志向のような「文化的」要因が、彼らの行動の「経済的」合理性とどのような関係にあるのか、また法社会学等の重視する「倫理的」観点からはなにかいえるのか、気になるところである。たとえばイラン法制の実務家たちの著作は、なにか手がかりを与えてくれるのだろうか。

もっとも、これらの点は本書の学術的な価値を、いささかも損なうものではない。本書はイランにおける商慣行と法の変遷をめぐって重要な貢献をなすものであり、アジア経済研究所第40回発展途上国研究奨励賞に値する秀でた労作であると評価できる。

(一橋大学大学院社会学研究科教授)

## ●受賞のことば——<sup>いわさきようこ</sup>岩崎葉子

このたびは第40回発展途上国研究奨励賞を賜りたいへん光栄に存じます。選考委員の先生方ならびに関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。

本書は、イランで「サルゴフリー」とよばれている店舗の用益権の売買慣行を扱ったものです。通常の「賃貸」や「所有権売買」の選択肢もありながら、一見すると店子にきわめて有利な「サルゴフリー方式賃貸契約」が、なぜかとも広範な店舗で採用されているのか、という疑問からこの研究は出発しました。

本書では、店子・地主双方の資産管理上のメリットを分析する経済学的アプローチ、契約を律する関連法制度や制度設計の特徴を検討する法学的アプローチ、過去のサルゴフリー売買慣行を探る歴史学的アプローチによって、この謎を解き、およそ100年間にわたる制度の歴史的形成・発展のプロセスを明らかにしました。

本書の内容は、おおまかな括りであれば経済史に分類されるものかと思いますが、方法論上いくつかの特徴をもっています。

第1は、利用できる数量的データがきわめて限られているため、フィールド・ワークによって収集した質的データを分析の基礎に置いている点です。経済制度を扱ううえで数量的データが絶対的に不足していることは、深刻な障害といわざるを得ません。これをいかに補い、論証の精度を損なわないよう工夫するかが大きな課題であり、もっとも腐心した点であったように思います。

第2は、サルゴフリーの制度をめぐる法的な

枠組みの変遷を論証のもうひとつの軸に置いている点です。したがって本書は法制史としての側面ももつことになりました。

事物相互のインタラクションに光を当てるために、さまざまな方法論の力を借りて、いわば複眼的に研究対象をとらえようとした本書のアプローチは、諸領域に細分化した今日の学問研究のあり方に照らせば、いささか冒険的に過ぎるかもしれません。もとより筆者の力量不足もあり、こうした試みが本書の叙述において十分に奏功したとも思われません。しかし今回の受賞は、研究対象へのより総合的な接近法を模索していこうとする筆者の背中を力強く押してくれるものとなりました。これを励みとして、今後もささやかな挑戦を続けていく所存です。

### 略歴

1966年東京都生まれ。東京外国語大学ペルシア語学科卒業、同学にて修士号取得。

1991年アジア経済研究所に入所、現在に至る。

2009年一橋大学大学院経済学研究科修了。博士（経済学）。

### 主要著作

『テヘラン商売往来——イラン商人の世界』アジア経済研究所、2004年。

『「個人主義」大国イラン——群れない社会の社会的なひとびと』平凡社、2015年。

*Industrial Organization in Iran: The Weakly Organized System of the Iranian Apparel Industry.* Springer, 2017.

●講評●

橋本榮莉『エ・クウォス——南スーダン・ヌエル社会における予言と受難の民族誌——』

くり た よし こ  
栗 田 禎 子

激動期の南スーダンで行われた貴重なフィールドワークの成果と、確かな問題意識に基く卓越した構想力に支えられた、優れた作品である。

「予言」をタイトルに掲げており、実際に（20世紀初頭の南スーダンに存在した）ンゲンデン・ボンという「予言者」を扱ってはいるのだが、本書で行われる作業は、所与の自明の「予言」のテキストを詳細に分析・解釈する、といったものではない。そうではなく、「予言の成就」（=すなわち人がある出来事を前にして「予言が実現した（エ・クウォス）」、なにかが「腑に落ちた」という感覚をもつ、という現象）というテーマを、さまざまな状況に置かれた人々が自らの経験をどのように位置づけ、意味を与えようとするのかという問題、自らの存在を（個人の一過的な生死として「終わらせる」のではなく）過去との連続性のなかでとらえ、また未来につなげていこうとする営みにかかわる問題としてとらえ、繊細かつ骨太な議論を展開している。

結果として、「予言」を導きの糸として「歴史」認識、「共同体」を取り巻く社会的・経済的環境（生業形態の問題を含む）とその変容、「他者」との関係性（およびそれによって発見される新たな「自己」像）、等の重要な問題群に光が当てられ、激動する現在のヌエル社会に生きる人々の経験とその内面に肉迫する優れたモノグラフが生まれた。

現在、南スーダンについて国際社会で専ら注目を集めているのは、スーダンからの分離独立や、その後南スーダン内部で発生した内戦、「大

統領派」と「副大統領派」の対立、といった事象であり、その文脈に位置づけるならば本書はいわば（元副大統領リエク・マチャールの支持基盤である）ヌエルのイデオロギー状況を分析した稀有な仕事であって政治学的にもきわめて貴重ということになるのであるが、本書を読了した読者は、南スーダン「内戦」の背後に横たわる歴史的・社会的深層に（マスコミ等の「現状分析」的アプローチとはまったく異なる次元で）触れたという感覚をもつであろう。ある地域の状況を描き出し、そこで生きる人びとの内面に分け入るうえで、文化人類学という学問にはこれだけのことができるのだ、という「凄み」を感じさせる作品である。

本書の後半では、調査者自身が「予言的事象の中に組み込まれていくプロセス」が著者の経験をもとに描き出され、「エ・クウォス」とは、人が他者との出会いを通じて「自己の中に内在する他者性」や、その自己の一部が「出来事として外部に顕現している」ことに気づいたときの驚きである、という鮮やかなまとめがなされるが、これはある意味で、地域研究や歴史学といった営みの意義自体を思い起こさせるような指摘である。南スーダン・ヌエル社会に関する優れたモノグラフであるだけでなく、同じ21世紀を生きるわれわれ一人ひとりの生や存在のあり方をも問い直させるような本といえる。

（千葉大学文学部教授）

## ●受賞のことば——<sup>はしもとえり</sup>橋本栄莉

このたびは、第40回発展途上国研究奨励賞という大変栄誉ある賞をいただきまして誠にありがとうございます。受賞作品である拙著『エ・クウォス』の出版に携わってくださった数多くの皆様と、賞の選定にかかわってくださった皆様に心より御礼申し上げます。

本書は、南スーダンのナイル系農牧民ヌエル社会を対象に、2008年から2013年にかけて行った現地調査によって得た資料に基づいて執筆されました。南スーダンといえば、日本では国家の独立や自衛隊の派遣、内戦、開発のイメージとともに語られます。しかし、南スーダンに暮らす人々が、一体どのようにこうした出来事を経験し、過去や未来、そして希望について語っているのかという側面はなかなか伝わってきません。本書は、南スーダンに暮らす人々の経験のあり方を、ヌエルというひとつの民族集団のなかで100年以上かけて発展してきた予言者信仰という観点から読み解こうとしたものです。

ヌエルの予言者とは、ヌエル語で神や精霊を意味するクウォスに憑依された人物です。20世紀初頭に存在していたヌエルの予言者ングンデンによる予言は、南スーダンの軍事政治情勢と緊密にかかわってきました。本書の目的は、ヌエルの予言者が歴史的に生成されてきた過程を明らかにするとともに、100年以上前より伝わる予言が、どのように現在の人々の経験を編成しているのかを描き出すことです。

ングンデンの予言は時として、人々を紛争へと動員するために利用されたり、平和構築の手段として引用されたりしてきました。しかし、予言を語るヌエルの人々は、けっして外部の社会から切り離されたヌエルの「伝統」のなかに生きる人々ではありません。むしろ本書が明らかにしたのは、ヌエルの予言をめぐる信仰が、イギリスによるスーダン地域の植民地支配から

二度の内戦、キリスト教の普及、そして近代的な通信技術など、社会が経験してきた歴史的变化とともに発達してきた側面でした。

そして、国家の独立と紛争という激動の時代を迎えた南スーダンで、人々は予言を信じたり、一転して疑ったりしながら、自身の経験を見つめ直していました。この状況のなかで、多くの人々に予言のもっともらしさを確信させたのが、「予言が成就した」という意味合いで用いられる「エ・クウォス」——直訳すると「それはクウォスである」の意——と表現される数々の出来事でした。

本書の出版後、私は国外へと逃れたヌエル人難民を対象に調査を継続しています。ここでも神話的過去が、人々の紐帯を創造し、難民としての経験と関わりあっていることが観察されています。今後も、クウォスの力と人々の経験とがどう関わりあっているのかを探求していきたいと思います。

### 略歴

1985年 新潟県生まれ

2008年 東京学芸大学卒業

一橋大学大学院社会学研究科より博士(社会学)取得(2015年)、高千穂大学人間科学部准教授(2017~19年)を経て、

2019年4月より 立教大学文学部准教授

### 主要著作

「難民の実践にみる境界と付き合う方法」『質的心理学研究』第18号、2019年。

Prophecy and Experience: Dynamics of Nuer Religious Thought in Post-independence South Sudan. *Nilo-Ethiopian Studies* (22), 2017.